

# フラッグに込めた「ありがとう」

東日本大震災で、相馬は津波で直撃した海岸に近い町は瓦礫となりました。あまりにショックな出来事で、音楽が町から消えました。モリタミュージックから音楽が流れてきた時、少しだけ日常が戻ったと安心したことを覚えています。

津波と原発事故で、仕事はできず自宅待機となっていました。そんな時、坂本サトルさんが駆けつけ歌ってくれました。このタイミングでも思いましたが、ミュージシャンの本気が伝わりました。その後、リクオさんが、大森洋平さんが、いつでも相馬にくるよ!とメッセージをくれました。

山口洋さんは全国の人を中継してくれ「MY LIFE IS MY MESSGE」の言葉に、自分なりの生き様を意識し励まされました。相馬市出身の堀下さゆりさんは、「この街に咲く花のように」は、自分の町の再生を願っている気持ちが重なり泣くことができました。くるりは、「soma」という曲を作ってくれて、本当にうれしく感じました。浜田真理子さんの「スクールMARIKO」では、全国で福島をリアルに感じようとしている人たちがいることを知り元気をもらいました。モンスターロシモフは、毎年、作業所で



うたのありがた(2014年)南相馬市の朝日座にて

ライブし、やなせなさんの「負けないタオル」を福祉作業所のみんなと歌いました。

ミュージシャンが来る度に、その想いに応えるため手書きでフラッグを描きました。その旗がステージの背景となり、シンボルになったことは忘れられません。音楽と仲間に支えられた10年でした。大変な状況だったけど、苦しいことばかりじゃありませんでした。だからこそ豊かな人生になったと言っても過言ではありません。皆さん。ありがとうございました。

(佐藤定広)



仕事のスケジュールを調整して、ようやく皆が集まった編集会議

# 10年もの間ありがとうございました

僕は、ほとんど記事を書かなかったスタッフだったので、なおさら申し訳なく思っています。

今まで全国の方々に支えられ、各地に私たちを呼んでもらい、直接お話をさせてもらったりと、沢山の縁に感謝しています。

もう10年と感じる自分と、まだ10年と思う自分がいます。災害大国に住んでいる以上は避けられない日本。

これから同じ様なことが起きないとは言えません。

震災になった時、当たり前にならなくなった事が、もっとも幸せと感じます。

何気ない生活のありがたさを大切に、前を向いてこれからも生きていきたいと思っています。

これまで「かえる新聞」を読んでくれた皆様。ご寄付をしてくれた方々。そして、今まで関わってくれた皆様に心から感謝します。

新型コロナウイルスにより、全世界が一瞬にして変わってしまいました。人と人との距離が遠くなり、逢いたい人に逢うことができない世界が訪れるなどは想像もしませんでした。これを、どう乗り切る事ができるかで次の時代が明るい世の中になるか否か分かれるところだと思います。

優しい気持ちを忘れず笑顔で前を向いて乗り切りましょう。それでは、みなさんお元気で。

(森田文彦)

**Fukushima Pocket gomihiroi**

ポケットに入るくらいほんの少しのごみ拾い  
みんなのファンアクションで海を守ろう

無料で「ふくポケ  
スターキット」  
をプレゼント!

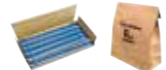
詳細はWEBで



https://fukushima.pokegomi.com  
期間:2021.4.1(木)-5.31(月)

スターキット 無料

トンガ:10本  
POCKETごみ袋:20枚



※福島県以外の方もご登録可能です  
※ご登録に費用はかかりません

福島県相馬市・南相馬市の今とこれからの伝えるコミュニティ・ペーパー

**かえる新聞**  
from 相馬・南相馬

2021.spring No.29

2021年4月 第29号

発行元 かえる新聞編集部  
編集 相馬市・南相馬市ほか有志  
協力 かえる新聞(いわきの子供を守るネットワーク)

〒976-0042  
福島県相馬市中村字田町2 さくらビル1F  
モリタミュージック内  
問い合わせ・配送希望  
somakaeru@yahoo.co.jp  
http://somakaeru.com



★記事の転載や転用をご希望の方はかえる新聞編集部までお問い合わせください。

# かえる新聞最終号 東日本大震災から10年



かえる新聞の取材で撮影した写真の一部

かえる新聞は、そうまかえる新聞として2012年2月に創刊号を発刊、当時は2か月に1回の発行ペースで、フリーペーパーとして、全国の希望者や地元の有志などに配布を行ってきました。

東日本大震災から10年、相馬市・南相馬市ではまだ完全ではないにしても、復興が進み、まちの様子や人の心も平常に戻りつつあります。

かえる新聞は、メンバー間で話し合いを行い、このタイミングで、最終号とすることとしました。これまで支えてくれた、全国の皆さんに感謝しつつ、今号では、メンバー全員が思い思いにこの10年間を振り返ります。

# 次のステップへ

『情報』って言葉は、江戸時代まで日本になかったんだってさ。森鷗外が明治時代に洋書を翻訳したときに『information』って言葉が出てきて、『情報』って日本語を無理やり作つたらしい。『情け』を『報じる』。お前も、情報を出すときにはどこかに『魂』を注入しておけよ。そうしないと、相手に伝わらないから。これは、東日本大震災が発生する10年ほど前に職場の先輩から聞かされた話です。今となっては、『情報』の語源に様々な説があるようですが、この先輩の話は、当時、とても腑に落ちた言葉でした。

あの日、あの年から10年目を迎えます。自宅は津波の被害を免れたものの、緊急時避難準備区域に指定され、家族が避難でバラバラになりました。人がなくなった市内は、ガレキが放置され、野犬がうろつき、商店やスーパーは一斉にシャッターを下ろし、走るクルマは、自衛隊車両とパトカー…。報道の役割があるはずのマスコミも一斉に逃げ出し、放射能が降り注いだ町は、真実が伝えられず、自分たちは国に捨てられたと感じていました。そんな絶望感マックスの中、あの年の12月にプロジェクトMY LIFE IS MY MESSAGEと出会いました。それまでの国からのメッセージは何一つ心に刺さらなかったのに、プロジェクトのメンバーや、全国から相馬に集まってくれたみんなが発する言葉は自分の心に真っ直ぐ刺さりました。もう一度、未来を描ける気持ちになりました。それから、吸い寄せられるように、当時立ち上がったばかりの「そうまかえる新聞」のメンバーに入れてもらい、相馬市と南相馬市の「今」を発信してきました。その後、これらのごことをきっかけに全国のたくさんの仲間とネットワーク

ができました。それは、今も自分のかけがえのない宝物です。

かえる新聞とMY LIFE IS MY MESSAGEが教えてくれたことは、人と人のつながりが奇跡を起こし、人と人のつながりがなければ奇跡は起きないということです。何千年という人の歴史を振り返ったとき、すべてのことはたった数人の出会いから始まったのだと思います。自然発生的に人が集まって集落ができ、田畑を耕す人、狩りや漁を行う人、道を作る人、それぞれが得意なこと分担しながら、やがて学校や病院などができて町ができていく…。きっとそれが自然なことであり、自分たちのDNAの根っこに、その潜在能力が残っていると思っています。一方、福島第一原発周辺の避難区域は、すべてがゼロになり、国は「復興」の名のもとに、今、躍起になってインフラの整備やハコモノを建設していますが、力を入れるところが違うような気がしてなりません。

かえる新聞は、メンバーと話し合い、今号を最後とすることになりました。震災から10年目が経過する節目で、急激に何かが変わるわけではありませんが、自分たちも、腰を据えて地元の人たちと手を携えて新しい町を作ることにエネルギーを注ぐべき段階に来ていると感じているためです。もし、かえる新聞とMY LIFE IS MY MESSAGEのプロジェクトがなかったら自分たちは今もそのような気持ちに持っていけなかったかもしれません。

かえる新聞で活動してきた約9年間、冒頭に書いた「情報」を皆さんにきちんと伝えられたかどうか自問しつつ、この2つのプロジェクトを通じて全国の皆さんから受け取った皆さんの思いを胸に、自分たちは次のステップに進みます。

(タカノシンジ)

## すべての縁に感謝

とうとうかえる新聞は最終号になってしまいました。2012年2月に創刊号が発行されてから丸9年、私は2012年9月の第4号からの参加になります。

初参加で急遽記事を書くことになり、時間もあまりない中めっちゃくちゃ焦りながら必死に書いた記事を、当時の編集Sさんに「逆転満塁ホームラン!」と誉められたのをすごく覚えています(Sさん、お元気ですかー?)。

思えば私たちの新聞は本当に恵まれていました。

記事を書くのは福島県内に住む私たち、いわば「中の人」ですが、その私たちを支え編集作業をして一緒に新聞を作り上げてくれたのは東京や神奈川、北海道と「外の人」たちでした。

この人たちの熱意と愛によって私たちは書き続けることが出来ました。

寄付という形で長きに渡り発行を支え続けてくださった多くの皆様。新聞の配布にご尽力くださった全国の皆様。ライブの際には会場で配布してくださったミュージシャンの皆様。そしてMY LIFE IS MY MESSAGE プロジェクトを通して私たちや福島を応援し続けてくださった山口洋さんを初めとするプロジェクトの皆様。

本当にたくさんの人たちに支えられ、応援されて10年目、ここまで続けることができました。

本当に本当にありがとうございました。

かえるのメンバーもまさに十人十色。それぞれが震災当時様々な境遇で様々な体験をしてきて、たくさんの想いを抱えていました。

新聞に記事を書くことによって、それらを少しずつ消化することが出来たのかもしれない。

読んでくれる人がいる、知ろうとしてくれる人がいると言うことがどれだけ心強いことか。

何度もぶつかり合って存続の危機を感じたこともあったけれど、それでも「中途半端には終わらせたくない」という思いは全員同じ。

発行頻度は落ちたものの、こうしてきちんと最終号を発行することが出来て、心の底からほっとしています。

この10年の間にも「被災地」はどんどん増えています。

相馬も2019年秋の台風や、ついこの前の2月13日の地震でもまた大きな被害を受けました。



また日は昇る。2021年1月3日の相馬の日の出

でも過去の経験はととても大きな力になっています。何よりも街や人が精神的にととても強くなっていると感じました。

かえる新聞を通して発信してきた私たちの経験は、これからも続くであろう災害に対して少しは誰かの役にたっていると、そう強く信じています。

とは言っても「原発災害」は二度とあってはならないこと。二度と起こさないため、役に立ててほしいものです。

様々な経験をさせてくれて、多くの人との出会いをもたらし続けてくれたかえる新聞。

私の人生の中のほんの8年ちょっとの時間ですが、かけがえのない経験になりました。

かえる新聞に携わらなかつたら親しくなることはなかったであろうたくさんの人たちとの縁を、これからも大切にしていきたいです。

今はこんな世の中だけど、いずれまた自由に旅をする事が出来るようになったら、お世話になった方々に会いに行きたいなと思っています。

そして、ぜひ皆さんにも福島、相馬へ足を運んでもらえたら嬉しいです。

これからも前を向いて進み続ける福島を見に来てくださいね。

長い間かえる新聞を応援していただき、本当にありがとうございました。

(菅野とし枝)

## 変わらない想い、生き方をメッセージに

2500人を超える人が、まだ見つかっていません。災害の中で起こった原発事故の決着をつける方法もまだ見つかっていません。10年経っても「まだ」。癒えようのない現実と、大きく変貌するまちの姿が混ぜこぜに息づいている、2021年の311を私は相馬市で迎えました。

何でもなかった日が何でもない場所が特別になってから、辛い思いをして泣いて泣いて立ち直ろうとして切り抜けた先に立っている人たちがこの地にはたくさんいます。

自分で決めたことだから、ほかのところで暮らすよりちゃんと意味を持って生きないといけないような気がして、勝手に頑張ってきましたが、本当に伝えたいことは今もうまく表せません。

いいことばかり書きたいけれど、大変でした、、、書くのも、考えるのも、メンバーを悩ませることも。やると言い出した手前引っ込みがつかない、それが本音だった気もするのですが、何かできることをしなければと、出向く先々で見聞きし、知るものが増えるほどに、目をそらすことが難しくなりました。何もできない場合の方が多いの、いくつもの心に留めておきたい出来事に出会って、このまちから離れられない気持ちが強くなりました。

この10年で情報の発信や伝達手段がどんどん進化して、紙の新聞を各地の皆さんに配送する方法はコストやエネルギーの面でも最適な方法ではなくなってるのを感じています。



津波の翌朝の相馬市の実家=2011年3月12日

コロナ禍のためとはいえ、仕事も交流もイベントも距離を経てオンラインで繋がれる時代、一昨年の水害時もSNSで無事を確認し合い、今年2月の福島県沖地震の当日は流行りたてのClubhouseも活躍してくれました。かえる新聞を通じてご縁して下さった多くの皆さんにもつながってもらっています。便利なツールは諸刃と言われるけれど、人が人を支え、この先の未来を幸せにするものでありますように

## 心から、ありがとうございました

心から、ありがとうございました。

絶望を感じたあの日から、10年になります。

今まで本当にいろんなことがありました。

あの時の、辛く悲しくささくれだった気持ちが、この10年の間に少しずつ、少しずつ、和らいで、前を向く歩みに変わっていきました。思いを寄せてくれた、たくさんの方々が気にかけてくださり、手を差し伸べてくださいました。感謝の気持ちで一杯です。また、同じく故郷のことを見、考え続ける、想いを同じくしたかえる新聞編集部のみんなと出会えたことも、自分にとってとても大きな出来事でした。新聞を読んで応援してくれた読者の皆さん、皆に出会うきっかけをくれたモリタミュージック森田さんと、相馬を支援し続けてくれたHEATWAVE山口洋さん、MY LIFE IS MY MESSAGEの皆さん・支えてくれた皆さんに、感謝の気持ちでいっぱいです。

それぞれ仕事や家庭を持ちながらの活動は、時には書くのが大変なこともありました。個人的には出産で産休をいただき、メンバーに負担が多くいってしまい申し訳なく思う事もありました。相馬や南相馬のファミリーレストランで夜な夜な行われたかえる新聞編集会議では意見がぶつかる事も多々あったけれど、それは、メンバーそれぞれが真剣に考えるからこそその衝突でした。きっと、震災がなかったら、出会わなかった、大切な仲間たちです。また、記事を書く私たちをずっと支え続けてくれた、東京、北海道、神奈川の編集チームの仲間たち。寄稿して下さった皆様。取材の申し出を快く引き受けて下さった皆様。配ったり、お店に置いて下さった皆様。かえる新聞を応援して下さったすべてのの方々。本当に、本当に、ありがとうございました。

いま、松川浦大橋は再開通し、津波の被害を受けた尾浜海水浴場のそばの住宅地だった場所は、子どもたちがのび

と、願うばかりです。

今では、普段のまちの様子や福島の現状を伝えることが仕事になりました。新聞制作から一旦卒業したころに生まれた小さい娘は小学2年生になり、創刊当時高校生だった大きい娘、くぼたんは、相馬・南相馬よりもさらに原発に近い双葉郡で復興に直接関わる仕事をしています。震災の年のツアーでご案内した津波に飲まれた実家跡地は、防災緑地の一部として整備され、うちの父は手放したその地に完成した大きな公園で施設管理をしながら、毎日地域の子どもたちを見守っています。

新聞発行を支援してくれたプロジェクトの名前は「MY LIFE IS MY MESSAGE」。自分の生き方そのものが自分のメッセージになることを教わりました。かえる新聞は終わりを迎えますが、私の毎日はこれからも変わらず続き、始まりの気持ちも今も変わりません。皆さんもどうか、今と未来を大切に生きてください。私も、そうしなくては。

癒えることと忘れることはどこかで似ているように思うけど、これからも私なりの想いが伝わる生き方を目指して、このまちで元気に暮らしていきたいと思います。

心を注いで下さったすべての方へ。心から。ありがとうございました。

(酒井ほずみ)



相馬市の尾浜こども公園=2021年1月

のび遊べる、大きな広い公園になりました。夏の海水浴場では一部遊泳もできるまでに復興しましたし、沿岸部もどんどん整備されています。

自分が子どもころに見た相馬の海とは違う景色になってしまいましたが、帰省するたびに出来ていく街並みを見ていて、心強く感じます。

そうやって少しずつ復興してきた相馬の街を、近年台風19号や集中豪雨被害、つい先日は震度6強の揺れが襲いました。

現実には厳しいですが、考えることをやめず、自分にできる事を探してこれからもやって行きたいです。

落ち着いたら、ぜひ、相馬の街に、遊びにきてくださいね。私も、皆さんの街にきっと、歌いに行きますね。

では、では、またいつか、お会いできる時まで。

これまでのご支援、心から、ありがとうございました。

(堀下さゆり)